

# 1200万人へのアプローチ!!～農業高校にしかできないことがある～

「地域との交流を通して、より多くの人に農業高校を知ってもらうためには、どうすればよいか。」

東北ブロック 青森県立三本木農業高等学校



農業経済科	2年	竹ヶ原	美咲
植物科学科	2年	堀内	幸呼
植物科学科	3年	千葉	誠康
植物科学科	3年	川村	洋斗
動物科学科	2年	相馬	未来
農業経済科	2年	根岸	りのか
生活科学科	2年	上野	舞
生活科学科	2年	沢目	臯月

## はじめに

私達を通う青森県立三本木農業高校は青森県南部地方に位置し、創立117年を迎える伝統ある農業高校です。私達は、これまで盛岡農業高校との合同研修会や農ク行事のポスター制作、アメリカ・台湾との高校生による全校田植え、プロジェクトオブザイヤーでの有名人による講演会等、次々と新しい企画を試みてきました。校内は盛り上がり、昨年も農業鑑定競技会で26回目の日本一を獲得するなど、県内外に知られる農業高校だと自負しています。

## テーマの捉え直し

そのような中で、今年度の農クテーマは「地域との交流を通して、より多くの人に農業高校を知ってもらうためには、どうすればよいか」というものです。正直、本校は多くの人々に既に知られていると考えていました。早速、現状を知ることを中心に、一般の方約200人を対象にアンケート調査を行うことにしました。「三本木農業高校を知っていますか」という質問には、85.4%の人が「知っている」「やや知っている」と答えていました。しかし、「三本木農業高校では、どのような学習が行われているか知っていますか」という質問では、何と、「知っている」と答えた人が34.4%と低い結果となったのです。私達は愕然としました。これまでの活動が自己満足で、本当の意味で知られていなかったのです。そこで、役員による検討会をすぐに関き、「知る」という言葉にポイントをしぼることにしました。そして、一つの考えに至ります。「知っている」というものは、「存在を知っている」という知識に当たるものと、「内容を理解するまで知っている」という認識にあたる



ものの、2つの段階があるのではないかというものです。つまり、一般の人は「農業高校ではどのような事が行われているのかを知っている」という認識のレベルまでは到達していない、という事が分かったのです。

確かに、現実の農業高校は一般社会の中に存在し、両者は近い関係にありますが、意識レベルでは、遠く離れた存在だと考えられたのです。そして距離を縮めるためには、私たち自身が一般の人々の意識へ近寄って行かなければならないと考えました。そこで、一番近い一般社会を考えた結果、それは、地域だということに気づいたのです。

### 課題への対策・実践活動

早速、「まちへ出よう、三農」のスローガンのもと、地域交流を通じた農業クラブ活動を積極的に展開し、三農を直に体験してもらう事で意識レベルでの交流をすることにしました。

まず、十和田きみがらスリッパ生産プロジェクトです。馬産地で有名だった十和田市で捨てられていた飼料用トウモロコシの皮から、スリッパを作り販売するもので、十和田市産品販売戦略課と本校植物科学科がタッグを組み進めています。この捨てられていたものから特産品を生み出す活動はマスコミにも大きく取り上げられ、地域から注目されています。

次に、ローソンと地域の特産品を使った新商品開発です。青森県の特産物を利用したパン、「アップルン」と、三農で獲れた食材を実際に使った「三農の恵み弁当」を販売しました。結果は、合計で6万6千食を完売し空前のヒット商品となるなど、三農のブランド力を強く感じる事が出来ました。

次に、本校生活科学科の生徒が先生役となり、地元の小学校での出前授業や本校農場での学習活動を行っています。小学生との交流学习を通じて、地域の現状を知り、同時に三農を知ってもらう良い機会となっています。

この様な活動を継続して行く中、なんと週刊女性自身の記者から「青森県におもしろい農業高校があるという噂を聞きつけたので、是非取材させてほしい」という申し入れがありました。学校生活を6ヶ月間密着取材したあと、とうとう全国版で特集が組まれ、140万部が発行されました。私達の活動が全国的に広がっているように感じられました。

そして何とんでも、青森県動物愛護センターとの交流から生まれた「命の花プロジェクト」。ペットの殺処分の現状を知ってもらいたい一心から始まった活動は、日本動物大賞で日本一を獲得し、フジテレビ全国版 Mr サンデーで再現ドラマとして放映され、本校卒業生を含む作家により2冊の本となりました。その様な中、なんと滝川クリステルさんから連絡が入ったのです。同じく殺処分ゼロを訴える NPO 法人の代表を務める滝川さんへ、手紙を書くなど積極的





なアプローチの結果、本校に来ていただくことができました。これも、地域交流から全国へと広がりをもせた活動だといえます。

そして、私達は決心します。東京へ行くことを。日本の中心である東京からみた三農はどのように見えるのかをこの目で確かめたいと思ったからです。六本木ヒルズでの大反響の農産物販売会、リーダーシップ編集部・週刊女性自身編集部・フジテレビ Mr サンデー制作部への逆取材を企画しました。驚きの連続でしたが、1番驚いたのは農業高校への、関心の高さです。「どんな勉強をしているの?」や「これらは学校で栽培しているの?」と行く先々で質問攻めにあいました。また、フジテレビ Mr サンデー制作部の伊藤さんへ「なぜ三農だったのか」という問いかけをしたところ、「農家が農業をしても、当たり前すぎる。けれども、同じことを今どきの高校生がやっていると、それだけで価値があるんだよ」と話されていました。さらに「人に知ってもらおう仕事は、とても難しいが、あなたたち農業クラブは、すでにその力を十分持っていると思う」とおっしゃられたのです。つまり、農業高校が社会と共に活動すること自体が、大きな魅力であり、オンリーワンの存在であることも分かりました。

もう、私達に迷いはありませんでした。学校という枠から、飛び出し、農業高校を経験してもらうことが学校・地域の両者にとって最善の方法であることが分かったからです。早速、「地域の問題解決し隊」を結成し、地域との交流をするきっかけを農クが作り出す活動を展開しました。大豆加工を中心とした地元企業の太子食品から出る大量の廃棄物を農業分野へ利用する研究会。さらに、最近では40万人を超える人々が集うB-1グランプリ全国大会が、今年の10月に地元十和田市で開催されるため、十和田バラ焼き非公認応援隊を結成し、大会で使う玉ねぎを地元小学生と本校農場で栽培しています。

さらに、日本を飛び出し、台湾でのPR活動も展開しました。台湾慧燈高校を訪問し高校生との交流を通じて三農農業クラブについてプレゼンする機会を得ることができ、海外へも三農をPRすることができました。

そして、プロジェクト最終章。なんと元AKB48の篠田麻里子さんが本校を訪れたのです。篠田さんが司会を務めるテレビ朝日の番組で三農を取り上げたいというものでした。当日は様々な授業を体験し、生徒とも大いに触れあい、その模様は7月12日に30



分番組として全国放送され、大好評を得ています。

## 成果

成果として、三農を取り上げていただいたメディアから換算してみると、今回のプロジェクトを通して、全国で三農を知ってもらうことができた人数は、なんと1千2百万人にもものぼることが分かりました。この数字は日本の人口の10%であり、やりがいと誇りを感じることができました。また、全国的に取り上げられた結果、地元の方から多くの激励の言葉や問い合わせ、さらに地元新聞社からはデーリー東北賞をいただくなど、地域から高く評価していただく結果となりました。

## まとめ

まとめとして、3つのことが分かりました。1つ目は、認識されるためには、知識に加え経験が重要で、農業高校を経験してもらうことが、知ってもらう事へとつながること、2つ目は、経験してもらうためには農業高校が社会へ飛び出して行くことが大切であること、加えて、一番近い社会である地域が全国への入り口であり、地域は全国へとつながっていること、そして最後に、これらを可能にする唯一の高校が農業高校であることが分かったのです。

## 今後の課題

1千2百万人という数字をみて、農業高校のポテンシャルの高さを今回確認できました。しかし、認識してもらうためには、輸送費確保、新しい交流活動、行政・企業との連携など課題が残されていることも事実ですが、必ずこの課題を解決し、これからも地域と共に未来を拓く、農業クラブを目指していきたいと考えています。



## 今後の課題

- ・校外へ、人と物を輸送する費用
- ・新しい交流活動の開発
- ・行政、企業との連携